

千鳥町の

人助け稲荷の

キツネ(続)

平成三年二月五日号

今回は前回に引き続き、千鳥町(富士南地区)の「人助け稲荷」について、地元石川雅也さんに伺いました。

流れ着いた稲荷さん

昔々のことです。富士川がはらんし、千鳥町の一帯も水浸しになりました。地区の人々が逃げ込んだ小高い場所の林には、お稲荷さんが流れ着きました。

村人たちはありがたがって、「よくおいでく

ださいました。どうぞ、この土地の守り神になってください」と、ほこらを建ててお祭りしました。それで、この島を稲荷島と言うようになったと言われます。

また、いつのころからキツネも多く住むようになりました。このキツネたちに村人はよくだまされましたが、ひどく憎んだり、いじめたりすることはありませんでした。と言うのも、キツネはお稲荷さんの使いですし、キツネに助けられたこともあったからです。

くつねの島が

ある夜、四軒屋の熊さんが宮島のお祭りによばれての帰り道、お稲荷さんの前を通りました。

横の川では、夜のことですから姿は見えませんが、魚がいっぱいいるらしく、ガシャガシャ音がしていました。

「ようし、いっぱい取ってやろう」



と熊さんは、赤飯やおすしの入ったお重をそばに置いて、川にザブザブ入っていきました。ところが魚は一匹もいません。

「おかしいなあ。こりやあキツネに化かされたかな」

と、お重を持って帰りました。

家に帰って、お重をおかみさんに渡して、びっくり仰天。

「お前さん、こりやあ、どういうわけだい」
お重の中身は何と、土と石ころだったのでした。熊さんは歯ぎしりして悔しがりました。

語ってくれた方 石川雅也さん